明日への扉 No.17

大隅・鹿屋が生み出す 本物を携えて世界へ

Taro Matsunaga

松永 太郎 さん

昭和49年生まれ。鹿屋高校入学と同時に吾平町へ転入。筑波大学大学院修了後沖縄へ移住し琉球の伝統芸能に出会う。舞台演出家のもとで演出や作曲を開始し、８年間の沖縄暮らしの後平成19年に帰郷。高校生ミュージカル「ヒメとヒコ」等を立ち上げる。（41歳）

８月に東京公演を控える鹿屋発ミュージカル「花いくさ」。世界を見据えた「本物」づくりのために奔走する日々。多忙な合間を縫ってのレッスンでは、真剣さの奥に楽しさをのぞかせる。

高校時代の私は「なぜこんな日本の端に生まれたんだろう」と故郷を消極的にとらえていました。ここではないどこかで自分は花を咲かせるのだと関東に進学しましたが、大学生活は思ったほどの手ごたえが感じられませんでした。

そんな時に出会ったのが沖縄。たまたま実習で訪れてその独特の文化に心奪われた私は、ワゴン車にすべての荷物を積み込むと当てもない移住を決行。思い返すと、沖縄暮らしは私にとってもう一つの大学生活でした。出会うすべてが新鮮で、毎日が学びの連続でした。特にウチナーンチュと自らを呼ぶ沖縄の人々が、自分の故郷を心から誇り、愛していること、文化・芸術がそのアイデンティティの中心にあることに感銘を受けました。結局８年間の沖縄暮らしで、私は自らの根っこと向き合うこと無しに自分の作品は生み出せないのだと悟り、鹿児島に帰郷しました。

13年ぶりに帰郷した鹿屋は様変わりしていました。商店街には劇場を含む立派な施設が完成していました。まずはここからだと思った私は、地元の高校生で作るミュージカルの企画書を手に、リナシティかのやの事務所を訪問。それが「ヒメとヒコ」の始まりでした。そして毎年変わるメンバーと意見を出し合い、鹿屋の文化財をストーリーに加えるなど、毎回違う演出を考えてきた「ヒメとヒコ」も今年で10年を迎えます。

平成27年は私にとって節目の年でした。鹿児島県で開催された国民文化祭では総合開会式の演出を任され、多くの「ヒメとヒコ」卒業生がメインキャストを務めました。また３年以上企画を温めていた新作ミュージカル「花いくさ」も上演することができました。

「花いくさ」は、「ヒメとヒコ」の卒業生たちの次の目標にと作った作品です。この舞台の原作は映画化が決定しており、そして私たちも８月に東京公演を行います。ついに鹿屋のアマチュア劇団が東京の商業演劇に挑戦するのです。これからは鹿屋に住みながら全国の舞台に立つことが夢ではなくなるかもしれません。

この４月から、縁あって劇団員の一人が鹿屋の農業生産法人で働いていて、社長と「乾燥野菜と舞台のコラボ商品を作ろう」と計画を練っています。野菜も舞台も、この雄大な大隅の大地から生まれるもの。そんな大隅の「本物」を携えて、世界で通用する劇団を目指したいと思っています。